

謎の鎌倉時代～村落は何处に～

未だ遺構が発見できず

統合移転前の吉田の景観は、室町時代からあまり変化がないことが明らかとなりました。それでは、鎌倉時代の吉田はどのような景観だったのでしょう。

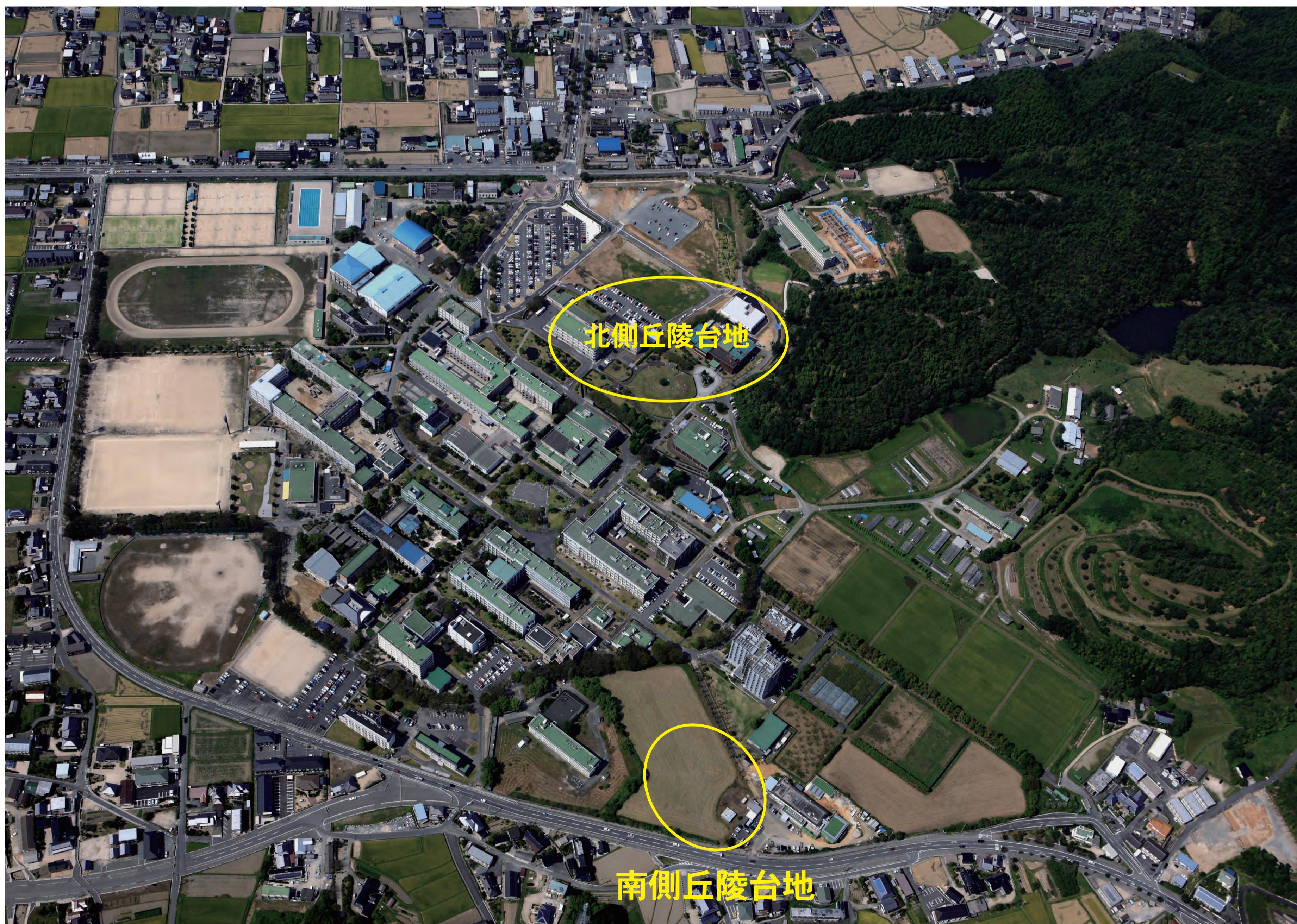
残念なことに、吉田キャンパスでは明確な鎌倉時代の遺構が未だ確認できていません。その一方で、キャンパス北側丘陵台周辺の調査において遺物包含層などから鎌倉時代に所属する多量の土器類が発見されています。またキャンパス南側丘陵台地からも該当期の遺物が出土しています。遺物の分布だけから見ると、室町時代とあまり変わらないのです。

なぜ生活痕跡が発見されないのでしょう。別の場所に集落が存在する可能性も否定できませんが、室町時代に至り大規模な整地(削平)が行われ、同じ場所に集落が再生されたのかもしれません。

鎌倉時代の出土遺物を見ると、輸入陶磁器(青磁)の多さが目につきます。また近畿地方で作られた瓦器も散見されます。このことから、吉田の地に地頭クラスの有力者が存在していた可能性も指摘できるのです。

文献的に見ると、鎌倉時代初期の建久8年(1197)、吉田を含む恒富保(保:農民が開墾した私田村落)と仁保庄に豪族三浦氏の一族である平子重経が地頭として補任されます。その後、子の重継に恒富保は譲渡され、重継は恒富氏を名乗ります。さらにその子弘重が狭義の恒富を継ぎ、弟の重教が分家し吉田氏を名乗ることになります。

このような歴史的背景も考慮した上で、今後の遺跡調査を継続していく必要があります。



吉田キャンパスにおける鎌倉時代遺物集中域
(南から)